近代英国のレヴァント貿易

——一八世紀の衰退について——

川分圭子

【要約】 英国の海外貿易は一六六〇年以降驚異的な発展期にはいる。しかし、この時期からレヴァント貿易は英国全体の動向と反して静的なものとなり、一八世紀以降は衰退する。本稿ではこの商業革命期におけるレヴァント貿易の停滞と衰退に焦点を当てて、多方面からその原因を考えた。その際、この貿易を独占していたレヴァント会社の貿易のやり方がどのようなものであったかを簡単に説明し、またレヴァント貿易の貿易統計を整理して貿易の推移と貿易品目の内容を明確にする作業を行った。レヴァント貿易のあり方と貿易品目の推移が明らかにするのは、商業革命期のレヴァント貿易はイスタンブル・アレッポ・イズミル三都市での英国産毛織物とレヴァント産生糸の交換という取り引きに極端にかたよっていた事実である。一つの貿易形態に極端に依存していた英国のレヴァント貿易は、一八世紀のフランス産毛織物の急激なレヴァント市場参入と、英国内でのレヴァント産生糸の需要の低下の影響を決定的に受けて衰退したのであった。そして、衰退を招き寄せることとなったこの取り引きの偏向は、英国のレヴァント貿易が一握りの商人集団によって掌握されており、貿易のスタイルが硬直化していたことに原因が求められるであろう。

史林　七三巻四号　一九九〇年七月

はじめに

一六世紀中葉、それまで英国製品の唯一の輸出市場であったアントワープを失うと、英国は初めて他の海外の諸地域との直接貿易に乗り出すことになる。この時数々の特許貿易会社が設立されるが、その中で一五八二年東地中海貿易を本格的に推進するため設立されたのがレヴァント会社であった。

当初、この会社の業務は毛織物の輸出と東方物産の輸入であった。しかし、このレヴァント会社のメンバーが中心となって東インド会社が設立されると、東方物産の輸入はこちらによってケープ・ルートから輸入されるようになり、レヴァント会社の輸入品目はレヴァント産の物資に限られるようになった。だが、レヴァント向けの毛織物輸出は、広幅織を主流として順調に成長し続け、一七世紀には英国の貿易活動の中で非常に重要な部門となっていた。こうして、レヴァント会社は英国でもっとも繁栄した会社として存在し、メンバー達はシティの上層部を形成して人々の羨望を集めたのである。ところが、一八世紀中葉になるとこの貿易は見るかげもなく衰退していき、一九世紀になるまで回復を見せない。これは、当時の英国が商業革命・産業革命を経て驚異的な経済発展を遂げていくのとは余りに対照的な姿であった。そこで本稿では、この英国のレヴァント貿易の一八世紀における衰退の原因を考えていくこととする。

英国経済史上でレヴァント貿易はどのように扱われてきたであろうか。残念ながらこの貿易に関する言及は非常に乏しい。近代英国経済史の研究書の多くでは、レヴァント貿易に関する記述は一、二箇所で、レヴァント会社設立の経緯と、一八世紀中葉の貿易の自由化について簡単に説明するだけで終わっている。[1] 英国でのこのような研究状況のため、日本でもレヴァント貿易について殆ど紹介されていないのが現状である。[2]

英国の海外貿易研究に大きな貢献を残したラルフ・デイヴィス Ralph Davis の研究態度にも問題点がある。彼は、一七世紀中葉から一八世紀に到る英国の海外貿易の発展に「英国商業革命」という名を送った名付け親であるが、彼の商業革命分析ではレヴァント貿易は南欧貿易の統計に含められている。[3] 一方で一九世紀になるとこれは中近東貿易のほうへ含められている。[4] このため、デイヴィスの分析はこの地域が英国経済に持っていた意味を知ろうとする上では役に立たないし、また長期的な視野でこの貿易の動向を見ていく上でも有効ではない。またデイヴィスは、一八世紀のレヴァント会社に焦点を当てた『アレッポとデヴォンシャースクエア、一八世紀のレヴァントにおける英国人貿易商達』という著作を残しているが、[5] これは一八世紀の数十年に限られているため、長期的な視野に欠け、衰退も短期的な要因で説明されている。

これは優れた実証的研究であり当時の商人達の日常を生き生きと描きだしているにもかかわらず、商業革命の時代を見通す彼の長期的な見方は取り入れられていないのである。

レヴァント会社についての個別研究としては、他にA・C・ウッド A. C. Wood の『レヴァント会社の歴史』があるが、[6] 彼の研究は通史を構築することに主題が置かれており、英国経済史上のレヴァント貿易の位置を考えるものではない。

このようなレヴァント貿易研究の不足は、この貿易が英国経済史の中心課題である商業革命・産業革命期に衰退しているので、研究者がこれらの大きなテーマを考える上でレヴァント貿易の分析に積極的な意義を見出し得なかったためであろう。しかし、レヴァントを経済的に魅力のない地域として切って捨ててしまうことには問題がある。

革命前夜まで英国以上の勢いで貿易が成長していたフランスにおいては、レヴァントは西インド・スペインに次ぐ第三の貿易地域であった。このことは、レヴァントが市場・原材料供給地として超一流でないにしても一級の魅力をもっていたことを示している。それならばなぜ、英国の場合にはレヴァント貿易が衰退していくのか。その解答は、英国の貿易構造、レヴァント貿易の有り様にこそ求められるのではなかろうか。

本稿では以上のような観点に立ち、長期に渡るレヴァント貿易の貿易額・貿易内容の変遷を知ることで解答を求めたいと思う。その場合、できる限り長期の貿易統計を作成する必要があるが、英国の場合もととなる貿易総監統計は刊行されていずマニュスクリプトの状態で保管されているので、本稿ではこれを整理したエリザベス・ブーディ・シュムペーター Eliabeth Boody Schumpeter の統計と、他の研究文献の引用から統計を作成する。[7]

① 例えば Phyllis Deane, *The First Industrial Revolution*, Cambridge, 1965.

② 会社の設立から一七世紀初頭までに記述が限られている。川北稔、『工業化の歴史的前提』岩波書店、一九八三年。山田勝、『近代イギリス貿易経営史』創成社、一九八一年。

③ R. Davis, "English Foreign Trade 1660-1700", *Economic History Review*, 2nd Ser., 7 1954. "English Foreign Trade 1700-1774", *Economic History Review*, 2nd Ser., 15, 1962.

④ R. Davis, The *Industrial Revolution and British Overseas Trade*, Leicester, 1979.

⑤ R. Davis, *Aleppo and Devonshire Square: English Traders in the Levant in the Eighteenth Century*, London, 1967. 以下、*Aleppo*, と省略。

⑥ A. C. Wood, *A History of the Levant Company*, London, 1935.

⑦ E. B. Schumpeter, *English Oversea Trade Statistics 1697–1808*, Oxford, 1960.

第一章　レヴァント会社

（一）　レヴァント会社とその商人

英国のレヴァント貿易は、一五八一年から一八二五年まで、レヴァント会社の独占下にあった。外国船や外国人による貿易は戦時以外は禁止され、[1] また英国人でもこの会社のメンバー以外は交易に参加できなかった。[2] 従って、この時期の英国のレヴァント貿易は原則的にはレヴァント会社の貿易と一致する。

この会社は設立当初は株式会社 joint-stock company であったが、まもなく制規会社 regulated company となる。[3] 制規会社とは外国貿易用の一種のギルド組織であり、品物の代わりに貿易区域を独占の対象とするものであった。[4] 国王の特許状が付与した独占地域は、「スルタンの領土と、ヴェネツィア、ザキントス、クレタ、ケファリニア島とその他のヴェネツィア共和国領」であるが、[5] 後にヴェネツィア領は会社の独占から離れ、交易はオスマン帝国領に限られた。

会社の組織は次のようなものであった。まず会社は入会規定を設け、これを満たす商人をメンバーとした。メンバーは現地に代理商を送って交易活動を行うほか、ロンドンでの会社の運営に参加した。年一回の特別選挙委員会 special general court of election では、総裁 governor、副総裁 deputy-governor、会計係 treasurer、支配人 husband、秘書 secretary 各一名と補佐 assistant 一八名の計二三名の役員がメンバーから選出される。委員会 general court は不定期に開かれ、そこでは大使や領事の選出や新メンバーの承認などの人事、内規の制定、政府との交渉の報告、レヴァント向

け通信文や政府への請願の作成などを行った。新メンバーの入会金、英国ですべての輸出入品に課せられる賦課金、レヴァントで領事の徴収する領事証明手数料が会社の財源であり、役員への給与や大使、領事館の維持費に使用された。[6]

大使や領事の選出と維持が会社に任されていた事からも解るように、彼らは政府代表として以上に会社の代表として行動した。異国で活動する商人の利害と身柄の保護や、商人たちの代表として現地の行政の長と交渉するのが彼らの主な任務であった。[7] しかし大使、領事の維持費は会社にとっては負担であり、現地の代理商たちが貿易の拡大のために新たな領事館の開設を再三求めても、会社側はなかなかこれに応じなかったようである。[8] レヴァント会社は初期には各地に領事館を開設したが、これらの多くはその後閉鎖されたり、あるいは閉鎖と再開を繰り返されており、常時維持されたところは少なかった。[9] また現地の人間（英国商人の商館で働いていた通訳などが多い）が領事に選出される場合もある。[10] むしろ選出に会社が関与せず現地や大使任せで、給与も会社から払われていない場合のほうが多かった。[11] 結局一七世紀の後半になると、会社が選出し英国人を派遣していたのは、イスタンブルの大使とアレッポとイズミル、カイロののほか二、三の都市の領事にすぎなかった。一八世紀後半には、会社の財政悪化のためこれらの維持も困難になり、一七六八年以降は政府が維持費の五割以上を援助している。[12]

レヴァント会社のメンバーたちは、各地に代理商を派遣して自分たちの商会の商館を建てた。英国の領事がいるところではその保護の下に、それがいないところでは他のヨーロッパ諸国の領事の保護を受け、それぞれに領事証明手数料を払っていた。[13]

彼らは二つの方法で貿易を行っていた。プライベート・シップ private ship 制度とジェネラル・シップ general ship 制度である。前者は各メンバーが個人で船をチャーターして行うものであり、後者は会社が船を用意し貿易を希望するメンバーに船積みの容積を割り当てていくものであった。

ジェネラル・シップ制度は次のように遂行される。まず、会社は委員会で目的港を決定し、これにあった船を投票で選

出し、チャーターする。次に出航の日と船荷の積載期日を決定する。容積の割り当ては申し込み順だが、申し込みが積載量を上回る場合でも別に船を用意してすべての申し込みを消化していた。輸入は輸出以上に希望が多いので、毛織物輸出一四―一六反につき一トンの輸入を許可するという規制を設けた。ジェネラル・シップが出航した年は、一六二五―四九、一六六〇―八三、一六八七―一七一三、一七一八―四四年である。一七世紀前半では、一―七隻、一七世紀後半以降は六―一五隻程度が派遣されていた。[14]

この制度を採用した当初の目的は、航海の安全の確保であった。個人では備えることのできない人員と軍備を積載した巨大な船団を仕立てることで、商人たちは危険な地中海を越えようとしたのである。だが、この制度のもう一つの目的は既に一六三一年の段階で「トルコにおいて毛織物と他の英国商品の価格を維持しそれらの高い評価を保つことと、現地と当地で徴収する領事証明手数料と賦課金を確保するため、より一層それからの売り上げと英国での収益を高めること」と述べられている。[15] 会社は商人たちのごまかしを防ぐため、英国においてすべての商品を登録させそれぞれについてのインヴォイスを発行してレヴァント各港で領事に船荷と照合させていたが、[16] それでも領事証明手数料その他の賦課金を確実に徴収することは困難であった。

レヴァント会社のメンバーはどのような人々であったのだろうか。レヴァント会社の入会規定は、（一）小売り商以外の商人、（二）ロンドンの商人の場合は自由民に限るというものであり、入会金は二七才以下は二五ポンド、二八才以上は五〇ポンドであった。[17] この要件を満たすこと自体はそれ程困難ではなかったと思われる。だが、実際にはレヴァント会社のメンバーは非常に限られていた。

単なる出資者であった株式組織の貿易会社のメンバーとは異なって、レヴァント会社のメンバーは実際に商業活動を行っている商人の家族や商会であった。彼らは現地に代理商 Factor を派遣して彼らと交信し、ブラックウェルホールで入荷すべき毛織物を調べ、輸入した生糸をオークションにかけて利潤をあげていかなければならなかった。この地域とそこ

で行われる貿易の内容について熟知していなければ、レヴァント会社のメンバーになる意味がなかったのである。このため採用は勢いレヴァント商人の身内―子弟や共同経営者―や現地の代理商からが中心となった。このコネクションのない者は千ポンド以上もの礼金を支払ってレヴァント会社に所属する商会のパートナーシップを購入したのである。[18]

しかも、レヴァント貿易は地中海に出没する海賊や私略船の危険に絶えずさらされており、また投資段階から利潤の回収までに長い時間を要したから、少々の損害や投資では揺るがないだけの資金力を必要とした。一六八〇年頃から様々の事情により貿易のリスクが高まると資本力の小さい商人たちは淘汰されてゆき、[19]この結果レヴァント会社のメンバー数は七七年の三七七名をピークとして減少に転じ、一八世紀前半には百名以下になった。[20]貿易が特殊の情報と知識を必要とし、相当額の資金を不可欠のものにしたという二つの理由が、レヴァント・コネクションともいうべき極めて限られた人数の閉鎖的な商人集団を作り上げていったのである。

一八世紀前半にレヴァント貿易が衰退の兆しを見せ始めると、メンバーが極めて限られていることや貿易のやり方によって貿易量を制限していることが貿易を阻害しているのだとする論調が、会社の内外で急速に高まり始めた。こうした議論の背景には、一七世紀末以来の「より自由な貿易」を求める大きな流れがあったとしなければならないであろう。[21]一七世紀末の英国では、特許会社による独占的な貿易体制が攻撃されるようになり、このような空気の中でレヴァント会社と同様の制規会社であるマーチャント・アドベンチャラーズやイーストランド会社は特権を失い事実上消滅していた。また、株式組織であった東インド会社や、王立アフリカ会社も部外者の貿易組織を承認しなければならなかった。一八世紀に入っても旧来と変わらない排他的な組織を保っていたレヴァント会社への風当たりは、この様な空気の中で次第に厳しいものとなってくる。[22]

一八世紀中葉にはレヴァント会社の不振は英国の知識人に広く知られた事実であった。一七四〇年十月九日付の貿易管理委員 commissioners of trade 報告では「その会社は国王がポルトに送る大使、領事その他のその国における官史を維

持するのに年八千ポンドを要するが、現在の低い貿易水準ではそれを維持することが出来ない。」と述べられている。[23] 会社の独占的な体質こそが、このような衰退を招いたと考えられたのである。

最初に批判の対象となったのは、ジェネラル・シップ制度であった。一七一八年から翌年にかけてレヴァント会社の商人から下院に陳情書が提出されている。[24] 彼らはこの制度が一八年に採用されてから船の派遣が著しく遅れていることに不満を述べ、「このような制限はこの王国の羊毛工業の交易のためならず、それどころか、フランス、オランダのトルコ貿易を必然的に助長するものである」としている。また、メンバーの数が極端に減少していることも批判された。「トルコ貿易の大部分はほんの数名によって行われており、その数名の中でさえ、より少ない数の人々が貿易に支配的な影響力を行使している。そして彼らの物資の量が国内外で販路が不足しているか、それとも価格が不足なのかに合わせて、自分たちの利益次第で残りの人々が船を出すか出さないか、取り引きするしないかを制限するようになっている。[25]」

レヴァント会社はこのような批判や時代の趨勢に抗しきれず、一七五三年に入会規定を緩和する。[26] またこれより先立って、四四年ジェネラル・シップ制度を廃止した。[27] 入会規定の緩和は直ちに功を奏し、メンバー数は以後順調に伸び、一八世紀末には四百名に達し、会社の最末期には八百名を数えた。[28] 貿易制度については、ジェネラル・シップ制度の廃止後も同様の制度が続いたが、[29] これも七〇年ごろから消滅して個人的な貿易が中心的になった。この結果船舶数は大幅に増え、一九世紀には年間六〇—三百隻が英国とレヴァント間を往来している。[30]

（二）アレッポ、イズミル、イスタンブル

前節で述べたように、レヴァント会社の独占区域は、オスマン帝国領およびヴェネツィア領であった。しかし、ヴェネツィア領との貿易は、理由は解らないが一七〇〇年頃を境として会社の独占からはずされた。[31] このため、一八世紀以降のレヴァント貿易はオスマン帝国との貿易に限られた。

しかし、レヴァント会社は帝国領の全域で活発に貿易活動を行ったわけではなかった。その交易は次第にアレッポ、イズミル、イスタンブルの三都市に集中するようになっている。一六三五年に、駐英ヴェネツィア大使は英国は広幅織をイスタンブルに一二〇〇〇―一五〇〇〇反、アレッポとイズミルにも合計で同じくらい送っていると述べているが、量から考えて輸出される毛織物の殆どがこの三都市で買却されていたのは疑いない。[32] また、一六七〇年には広幅織の輸出の六〇%がアレッポに、イズミルとイスタンブルに三〇%が送られている。[33]

イスタンブルはオスマン帝国最大の都市であり、ここではヨーロッパ産の毛織物を大量に売りさばくことが可能であった。しかし、ここでの活動は輸出に限られていた。[34]

アレッポは、ユーフラテス川ぞいを通ってペルシアとオスマン帝国を結ぶキャラバンルートの地中海側の終点であった。[35] このユーフラテスルートを通るもっとも重要な商品は、カスピ海沿岸地域で生産される生糸であり、この交易が一六世紀以降の時代にアレッポに繁栄をもたらしたのである。生糸の顧客は、ヨーロッパ商人であった。一六三〇年代の中ごろには、ペルシアで生産される生糸のおよそ三分の二がアレッポに流れ込み、その殆どがヨーロッパに輸出されていたと言われている。[36] また、アレッポの後背地では、生糸、原綿が栽培されていて、この町はこうしたシリア産の物資の集散地としても機能していた。しかも、シリア、ペルシアともにヨーロッパ産毛織物の消費地域であった。シリアでは地味な色のものが一般的な外出着として好まれ、ペルシアでは薄手の明るい色のものが好まれた。[37] 一七世紀の後半においては、アレッポを通して輸入される英国産毛織物の約半分がペルシアに送られ、残りがシリアで消費されていたようである。[38]

生産地でのペルシア産生糸の購入と、アレッポへの輸送は、アルメニア商人によって独占的に行われていた。[39] ペルシアとオスマン帝国間では戦争も頻繁に生じており、シーア派のペルシア商人とスンナ派のトルコ商人との間には感情的な食い違いも起こりやすかったため、キリスト教徒のほうが活動しやすかったといわれる。[40] 英国商人は直接生産者から生糸を買い付けるために内陸部に商館を置こうとしたが、結局成功せず、レヴァント会社の活動は沿岸部に留まっている。[41]

しかし、このようなアレッポの繁栄は、一八世紀の中ごろに終わりを告げる。これは、サファヴィー朝の滅亡とナディール・シャーの登場が壊滅的な荒廃をペルシアに引き起こしたためであった。一七三〇年には、一六〇トンしか生糸が生産されなかったとまでいわれており[42]、これ以降ペルシア生糸の交易はほぼ完全に終わった。アレッポはもはやレバノン山脈の生糸や南シリアの綿花など地元の物産を供給するに過ぎなくなった。

アレッポと同様にペルシア産生糸の集散地として発達した都市として、イズミルがある。イズミルの発展はアレッポより遅れて一六二〇年頃から始まるが[43]、首都に近いため政府のコントロールがより直接的に及んでおり、ルートが安全で途中で課せられる通行税も小額ですんだので[44]、早くも一七世紀の末には対ヨーロッパ貿易でアレッポを凌ぐようになった[45]。この都市でもヨーロッパ産毛織物は大量に輸入され、ペルシアに送られる他、アナトリアの中流階級向けに売りさばかれた[46]。イズミルにはまたアナトリアの生産物が集まった。ブルサやキオス島などで生産される生糸、アンカラ周辺の特産であるモヘア、イズミルの後背地の平野部で作られた原綿、エーゲ海の島やアナトリアの沿岸部で栽培される干ぶどうが、その主なものである。特にブルサ付近の生糸生産とイズミルの後背地での綿花栽培は一八世紀になってからめざましく発展し、この世紀の後半以降、ペルシア産生糸にかわってイズミルの主要な輸出品となった。

この三都市への集中がどのような理由によるのかはっきりと明示している研究はない。しかし、ウッドは、レヴァント会社や商人が貿易の拡大よりはトルコへの供給量を限って安全に巨額の利潤を得るほうを好んでいたと考えているようである[47]。少なくともレヴァント会社は一六八三年以降はこの三都市以外の土地での交易活動については個々の商人に任せ、関与しないこととした[48]。注意しなければならないのは、一七世紀の後半には英国はレヴァントの毛織物市場を殆ど独占していたことである。このため、市場操作は比較的容易であったに違いない。また、この時期レヴァント商人の数が減少していること、しかも貿易量自体は増えていることも忘れてはならない。つまり、この時期商人一人当たりの貿易は増大していたと考えられる。商人たちは新たな地域に商館を開く労をとらなくても十分に利益をあげていたのである。さらに時

を経るにつれ、ますます商人たちは代々やってきたアレッポやイズミルでの生糸と毛織物の交換という業務に満足し、リスクを伴う交易の拡大に興味を示さなくなっていったと想像できるのではなかろうか。[49]

第二章で触れるように、英国のレヴァント貿易は一七世紀の後半から一八世紀の前半まで殆ど生糸と毛織物の交換のみで成り立っている。この時期はまた、レヴァント貿易が最も繁栄した時でもあった。すなわち、英国のレヴァント貿易とはアレッポ、イズミル、イスタンブルにおける毛織物と生糸の交易であると言い切ってしまっても言い過ぎにはならないだろう。

生糸と毛織物の交易が振るわなくなった一八世紀後半になると、会社は貿易拠点の増加に努力するようになった。貿易不振にもかかわらず、会社はギリシアである程度成功することができた。[50] ギリシアでの拠点はテサロニキである。六〇年代には、アレッポ、イスタンブル、そしてイズミル、テサロニキ両都市に送られた広幅織の割合は、それぞれ三五・七%、一七・九%、四六・四%となっている。[51] 一方で、エジプトでの貿易の努力は一九世紀になるまで結局むくわれなかった。カイロには一七、一八世紀の前半を通してほぼ常時領事がいたが、キリスト教徒の商人の保護権を巡ってフランスとの争いが絶え間なく、貿易においてもフランス産毛織物が英国産を凌駕していた。[52] レヴァント会社は遂に一七五四年領事館を放棄するにいたる。[53] エジプト貿易が重要になるのは、ナポレオンのエジプト遠征失敗によるフランスの撤退以後である。メフメト・アリの富国政策によって綿花の生産量が急増すると、エジプト綿はレヴァント貿易の中でもっとも重要な商品となっていく。

① 一七世紀初頭までは外国人による貿易は行われていたが、ミラードのあげる数値によれば極めて小額で、無視できるものである。A. M. Millard, "The Import Trade of London, 1600-1640", unpublished ph. D. thesis, 1956, p. 105. Appendix. vol. 2, Table. C. 一六一五年の Royal Proclamation は、「全ての外国人だけでなく、その組織（レヴァント会社）に出入りのできない我が国の臣民にも、前述の会社の特権に逆らって前述の物資（レヴァント地方の物品）を持ち込むことを一般に禁止、制限」し、また外国船での輸出入を禁止した"J. Thirsk & J.R. Cooper, ed., *Seventeenth Century Economic Documents*, Oxford, 1972, pp. 462-3.

② ①で引用した Royal Proclamation にもあるように、会社所属の商人のみがレヴァント貿易を行うことができた。会社はメンバー以外の者が貿易を行った時は扱った商品の二〇%の科料をとる権利を認められていた。

③ 株式会社から制規会社になったのは、ヴェネツィア会社と合併する前後の一六世紀末の頃である。Wood, *op. cit.*, p. 23.

④ ジョン・クラパム、山村廷昭訳『イギリス経済史概説』未来社、下巻、三八一頁。

⑤ 一六〇〇年の特許状。Cecell Thomas Carr, *Select Charters of Trading Companies. 1530–1707*, Abingdon, repr. 1978, pp. 30–43. ヴェネツィア会社と合併以前の一五八一年の特許状にはヴェネツィア領は含まれていない。R. Hakluyt, *Principal Navigations, Voyages, Traffiques & Discoveries of the English Nations*, vol. 6, Grasgow, 1904, pp. 73–92.

⑥ 会社の組織については、Wood, *op. cit.*, Chapter 11 を参照のこと。

⑦ 一七、一八世紀の領事体制については、D. C. M. Platt, *The Cindevella Service; British Consuls 1825*, Connecticut, 1971, pp. 9–15 を参照されたい。

⑧ 一六九〇年会社がテサロニキに領事を置くことを拒否した時、副総裁は「会社はすべての領事館や商館の新設を、会社の主要部から樹液を吸い上げる枝葉のように思っている」と述べている。Wood, *op. cit.*, p. 122.

⑨ バーバリーの沿岸部では、アルジェやチュニスに領事が置かれたが領事が身柄を拘束され身の代金を要求されたりすることが多発し、すぐに放棄された。一七世紀中葉以降は政府の代表としての領事が置かれている。リヴォルノやヴェネツィアに置かれていた領事も王政復古以降は国王が維持しており、会社とは関係をもっていない。*ibid.*, pp. 61–66. カイロでは領事が一五八〇年より一七五四年まで置かれたが、常時置かれていたのではなく、ヴェネツィアの領事などが兼任することもあった。R. Feddan, "Note on the British Consulate in Egypt in the 17th and 18th centuries", *Bulletin de L'Institut d'Egypt*, 27, 1944–5, pp. 1–21.

⑩ 例えば、一六一六、二六年のザキントス島の副領事は現地の人間である。Wood, *op. cit.*, p. 66 クレタやアテネの領事も現地の人間である場合があった。*ibid.*, p. 73, p. 1.

⑪ Feddan, *op. cit.*, p. 1.

⑫ Wood, *op. cit.*, p. 161.

⑬ Feddan, *op. cit.*, pp. 8, 9.

⑭ ジェネラル・シップ制度は Wood, *op. cit.*, pp. 211–2, Davis, *Aleppo*, pp. 172–188 に詳しい。これは制規会社特有の制度である。ジョン・クラパム前掲書三八一頁。

⑮ Wood. *op. cit.*, p. 137. Davis, *Aleppo*, p. 174.

⑯ Wood, *op. cit.*, pp. 209–210.

⑰ Davis, *Aleppo*, p. 50, Wood, *op. cit.*, p. 95. 特許状では mere marchants でない者と表記。また一六一一年の特許状で「ロンドンかその近郊二〇マイル以内に住む貴族かジェントルマン、またはシティの自由民」と定められ、ロンドン商人に限られた。

⑱ Davis, *Aleppo*, pp. 66–67.

⑲ *ibid.*, pp. 62–63.

⑳ レヴァント会社のメンバーは、一六七六年には三六四名、翌年は三七七名でこれが記録に残っているうちでは最大である。一七〇一年には二一四名、一七二〇年の頃には二百名前後になっている。一七三一年頃には実際交易活動をしていたのは四二名であった。*ibid.*, pp. 60–2, Wood, *op. cit.*, p. 151.

㉑ C. Wilson, *England's Apprenticeship 1603–1763*, London, 1965, p. 271.

㉒ *ibid.*, pp. 172–6, 270–1.

㉓ J. Hanway, *A Historical Account of the British Trade over the Caspian Sea*, London, 1753, vol. 1, p. 62.

㉔ *ibid.*, pp. 54–58.

㉕ Davis, *Aleppo*, p. 49.

㉖ Wood, *op. cit.*, p. 156.

㉗ *ibid.*, p. 157.

㉘ 一七九七年には四百名、一八二五年には八百名ほどになった。*ibid.*, pp. 157, 195.

㉙ デイヴィスはジェネラル・シップ制度の廃止後も同様のメイン・シップ main ships という制度が七〇年代にまで続いたとしている。Davis, *Aleppo*, pp. 186–9. また、ウッドも一七五三年の法令で商人たちは「別々にでも一緒にでも separately and jointly」貿易を行う自由があるとされていたと述べて、ジェネラル・シップ制度の残存をほのめかしている。Wood, *op. cit.*, p. 157.

㉚ *ibid.*, p. 158.

㉛ *ibid.*, p. 121.

㉜ T. Stoianovich, "Pour un Modèle du Commerce du Levant: Economie Concurrentielle et Economie de Bazar 1500–1800", *Bulletin de L'Association Internationale d'Études du Sud-Est Européen*, 12–2, 1974. p. 77. ただし、ストヤノヴィッチはこの数字は四一五倍に誇張されていると考えている。この頃のレヴァント向け毛織物の総輸出額は平均六千一六五〇〇反位であると彼は推定している。

㉝ *ibid.*, p. 80.

㉞ Davis, *Aleppo*, pp. 36–7.

㉟ アレッポについては近年次のような労作が出版された。アレッポでのヨーロッパ商人や現地の商人の活動が具体的に示されている。Bruce Masters, *The Origins of Western Economic Dominance in the Middle East: Mercantilism and the Islamic Economy in Aleppo, 1600–1750*, New York, 1988.

㊱ *ibid.*, p. 24.

㊲ *ibid.*, p. 25–6.

㊳ *ibid.*, p. 25.

㊴ 「イルシア・トルコ間の貿易はその殆どがアルメニア商人によって行われている。私の知るかぎりでは、少なくとも一万人のアルメニア人がトルコに住む。彼らは主としてイスタンブル、イズミル、アレッポに滞在する英国、フランス、オランダ商人に雇われている。」とハンウェイは述べる。Hanway, *op. cit.*, vol. 1, p. 44. Masters, *op. cit.*, pp. 82–87.

㊵ Masters *op. cit.*, p. 74.

㊶ *ibid.*, p. 87.

㊷ *ibid.*, p. 30.

㊸ イズミルの発展については、Ulker Necmi, "The Rise of Izmir, 1688–1740", unpublished ph. D. thesis, 1974. に詳しい。

㊹ Masters, *op. cit.*, p. 28.

㊺ *ibid.*, p. 28.

㊻ Necmi, *op. cit.*, p. 125.

㊼ Wood, *op. cit.*, p. 127.

㊽ *ibid.*, p. 128.

㊾ 幾つかの商会は二、三代続いてレヴァント貿易にたずさわっており、業務に熱心な商人もいるが、機械的に取り引きを繰り返している者も

た。Davis, *Aleppo*, pp. 72-3.

(50) Wood, *op. cit.*, p. 164.

(51) Stoianovich, *op. cit.*, p. 89.

(52) Wood, *op. cit.*, p. 33.

(53) Feddan, *op. cit.*, p. 21.

第二章　レヴァント貿易の貿易額と貿易品目の推移

前述のように、レヴァント会社の貿易地域はもともとはヴェネツィア領を含んでいたが、一八世紀にはいる前後からトルコ領に限られるようになっている。従って英国のレヴァント貿易の統計は、一七世紀まではヴェネツィア貿易とトルコ貿易の両方を含むものとして、一八世紀以降はトルコ貿易のみとして扱うのが妥当であろう。①

最初に貿易額の推移を調べる。表一―三では一七世紀前半の輸出額が欠けているが、一六二〇―六〇年レヴァントに輸出された毛織物は六千反程度で②一七世紀後半の半分から三分の一くらいであるから③、一七世紀前半の平均的輸出額の三分の一として十万ポンドに達していなかったと思われる。④とすれば、貿易の推移はつぎのようにまとめられる。レヴァント貿易は一七世紀を通して次第に成長し、一六六〇年代に輸出が二〇万ポンド弱、輸入が二〇―四〇万ポンド程度という水準に到達、以後数十年のあいだこの状態を維持した。しかし、一七三〇年頃から輸出入ともに減り始めて、少なくとも八〇年代までこの状態は続いた。この後貿易が完全に回復するのは一八一〇年代以降である。

表1　レヴァントからの輸入(1587―1634)

年	I	i	%
1587―88	£586,886	£ 16,652	2.8
1588―89	563,126	7,608	1.4
1620―21	1,043,323	181,997	17
1625―26	730,782	73,570	10
1629―30	1,060,159	352,263	33
1633―34	1,314,040	212,186	16

%は海外から英国への総輸入額に対するレヴァントからの輸入額の割合を示す
I…英国の総輸入額
i…レヴァントからの輸入額
Millard, "The Import Trade of London 1600-40", appendix.

英国の海外貿易においてレヴァント貿易が占めていた位置はこの間どのように変化しただろうか。英国の海外貿易総額にレヴァント貿易額が占める割合を調べてみると表一、二に示すようになる。一七世紀前半の輸出と一九世紀に関して数

値が示されていないのでこれを補足する。先に、一七世紀前半のレヴァント向け輸出額は通常は十万ポンド以下と考えた。一方、英国の海外向け総輸出額については、一六〇五—一四年は百—一三〇万ポンドであり、一六四〇年は一三五万ポンドと推定できる。[5] こうしてみると一七世紀前半においてレヴァント向け輸出が総輸出中に占める割合は一割位であろう。また一九世紀については、一八一〇年代まで輸出、輸入ともに一割を割り、二〇年代では一—二%程度、一八四〇、五〇年代では輸出が四—六%、輸入が二%弱となる。[6] 表一、三と以上の補足を合わせるとレヴァント貿易の英国の海外貿易中に占める割合の変化は以下のように整理できる。一七世紀前半は輸出は一割、輸入では三割位である。王政復古後はこの割合は若干低下するがそれでも輸出入とも一割前後のシェアを保っている。だが、一六七〇—九〇年代にかけてこの割合

表2　英国の海外貿易額と対レヴァント輸出輸入額の比較（1,000£）

年	E	I	e	i	e／E	i／I
1663, 69	2,039	3,495	180	421	8.8	12.0
1699—01	6,419	5,849	234	315	3.6	5.4
1701—5	5,779	4,570	164	264	2.8	5.8
1706—10	6,233	4,227	205	242	3.3	5.7
1711—15	6,794	4,983	195	321	2.9	6.4
1716—20	6,893	5,945	248	300	3.6	5.0
1721—25	7,592	6,576	204	288	2.7	4.4
1726—30	7,976	7,201	209	296	2.6	4.1
1731—35	8,543	7,290	195	227	2.3	3.1
1736—40	9,347	7,225	160	175	1.7	2.4
1741—45	9,493	7,151	96*	164	0.9	2.3
1746—50	11,152	7,130	143	164	1.3	2.3
1751—55	12,785	8,235	123	162	1.0	2.0
1756—60	12,153	8,297	52	153	0.4	1.8
1761—65	14,436	10,009	75	125	0.5	1.2
1766—70	14,029	11,831	73	124	0.5	1.0
1771—75	13,692	12,710	125	146	0.9	1.1
1776—80	11,792	10,401	89	126	0.8	1.2
1781—85	12,653	11,963	35	67	0.3	0.6
1786—90	16,778	15,921	102	194	0.6	1.2
1791—95	23,011	18,294	155	212	0.7	1.2
1796—1800	32,254	22,821	127	106	0.4	0.5

E…英国から海外への総輸出額
I…海外から英国への総輸入額
e…レヴァント向け輸出額
i…レヴァントからの輸入額
e／E，i／Iは%表示
1663, 69のi…Davis, "English Imports from Middle East, 1580-1780", p. 202.
1669—1701のEとI…Davis, "English Foreign Trade 1660-1700", pp. 164-5. 但し1663, 69はロンドンの1港の数値。
他…Schumpeter, *English Oversea Trade Statistics 1697-1808*, pp. 17-8.
Whitworth, *State of the Trade of Great Britain in Its Imports and Exports Progressively from the Year 1697*, pp. 37-8. ウィトワースは毎年の数値を出しているので5年ごとに平均値を計算した。ウィトワースとシュムペーターは共に貿易総監統計を使っているので数値は一致するが、*印のところだけ一致していない。シュムペーターでは90となっている。

は低下し、一七〇〇年前後には輸出が総輸出に占める割合は三％前後、輸入に関しては五％前後となる。三〇年代以降の貿易の衰退期にはこの割合は急速に低下し、一八世紀後半から一八一〇年代までは輸出は一％以下、輸入は一％前後となっている。しかし、二〇年代以降は輸出の割合は四―六％、輸入のほうは二％まで回復する。

つまり、レヴァント貿易は一七世紀前半は英国にとって非常に重要な貿易部門であったが、一七世紀後半からその重要性は失われ一八世紀後半には全く取るに足らないものになったと考えられる。だが一九世紀に入ると急速な貿易成長が生じ、特に輸出に関して無視できない比重を占めるまでに回復した。

一七世紀前半において、レヴァント貿易が非常に重要であったことは、当時ルイス・ロバーツがレヴァント会社を評して「英国のどんな会社と比べても見劣りすることのない、最も繁盛した、また国家にとって利益の多い会社」と述べたことからも理解される。[7] 一六二〇年代の毛織物の輸出不況のおりには、レヴァント市場の成長が英国経済を救った。このように繁栄していたレヴァント貿易が一七世紀後半から次第に重要性を失っていくのはなぜなのだろうか。そして一九世紀になって急激に回復するのはなぜなのか。

表3　レヴァント向け輸出輸入額（1800―1858）

年	輸　出	輸　入
1800	£157,450	£199,773
1806	129,695	136,153
1807	19,167	113,258
1808	13,686	57,357
1809	101,860	184,920
1812	311,029	243,894
1816(7)	299,241	186,289
1818	806,530	369,052
1820	551,791	417,158
1824	747,738	746,848
1825	633,147	1,207,035
1825―27	1,088,000	875,000
1840―43	4,358,000	1,205,000
1854―58※	4,337,000	2,370,000

※…エジプト，ギリシア，シリア，パレスチナ，モルダヴィア，ワラキアを含まない。
1800年から1825年まで…Wood, *A History of the Levant Company*, pp. 180, 188, 193, 194.
他…Charles Issawi, *The Economic History of Turkey 1800–1914*, p. 86.

開始期のレヴァント貿易が持っていた重要性が一七世紀後半以降次第に失われるのは、この時期英国の海外貿易全体が驚異的に発展する一方でレヴァント貿易が全く成長しないためである。一六六〇年代から一七七〇年代までに英国の海外貿易は、輸出は六―七倍、輸入は四倍程度に成長した。[8] この商業革命期にレヴァント貿易が最初は殆ど成長せず、後には衰退さえしていくことは注目すべき事態である。

（単位：£）

あかね	その他の染料	胡しょう	その他の香辛料	コーヒー	薬　品	砂　糖	その他	不明分	総　計
		1,040 0.6	2,088 1.1		1,867 1.0	17,264 9.5	3,378 1.9	6,347 3.5	181,997 100
	2,295 3.1				816 1.1		0 0	3,141 4.3	73,570 100
			1,728 0.5		5,228 1.5		4,766 1.4	3,965 1.1	352,263 100
					3,042 1.4		2,978 1.4	5,069 2.4	212,186 100
								39,000 9.3	421,000 100
								58,055 36	162,018 100
								94,072 31	303,072 100
				3,000 1.0				17,000 5.4	314,000 100
				3,000 0.8				16,000 4.5	356,000 100
								26,000 17	152,000 100
107,218 44								136,646 5.6	243,894 100
78,808 42								76,739 24	186,289 100
111,825 30								149,670 40	364,052 100
120,677 29								123,022 29	417,158 100
154,412 21								115,993 16	746,848 100
190,293 16								158,432 13	1,207,035 100

ただし，97—98年の原綿と綿糸の欄は綿糸のみで Kurmuş の数字。Kurmuş は重量で表記しているのでそれを換算したもの。(483136 lb×0.027£/lb＝13045£，換算レートは，シュムペーターから算出) O. Kurmuş, "The Cotton Famine and Its Effects on the Ottoman Empire", in H. İslamoğlu-İnan, ed., *The Ottoman Empire and the World-Economy.*

表4　レヴァントから英国への輸入の商品構成

年＼商品名	生　糸	原綿と綿　糸	果　物（干ぶどう）	織　物（混織）	織　物（絹）	モヘア（獣毛）	その他の糸	没食子	インディゴ
1620—21	32,037	42,189	48,890	17,807			5,104	2,483	3,370
%	18	23	27	9.8			2.8	1.4	1.9
1625—26			64,258		3,060				
%			87		4.2				
1629—30	125,246	29,675	61,668	15,571	74,080	11,803	13,212	5,321	
%	36	8.4	18	4.4	21	3.4	3.8	1.5	
1633—34	62,578	3,809	85,033	19,105	5,000	1,618	13,275	10,679	
%	29	1.8	40	9.0	2.4	0.8	6,3	5.0	
1663, 69	172,000	28,000	79,000			45,000		5,8000	
%	41	6.7	19			11		14	
1697—98	86,000	13,045	4,918						
%	53	8.1	3.0						
1699—1700	209,000								
%	69								
1699—1701	219,000	25,000	5.000			32,000		13,000	
%	70	8.0	1.6			10		4.1	
1722—24	274,000	12,000	4,000			40,000		7,000	
%	77	3.4	1,1			11		2.0	
1752—54	81,000	20,000	11,000			13,000		1,000	
%	53	13	7.2			8.6		0.7	
1812									
%									
1817		799	29,943						
%		0.4	16						
1818	41,846	24,112	41,599						
%	11	6.5	11						
1820	122,315	7,863	43,281						
%	29	1.9	10						
1824	180,424	249,271	46,748						
%	24	33	6.2						
1825	193,293	611,547	53,470						
%	16	51	4.4						

1620—34…Millard, "The Import Trade of London 1600-40".
1663, 69, 1699—1701, 1722—24, 1752—54…Davis, "English Imports".
1697—98, 1699—1700, 1812以降…Wood, *A History of the Levant Company.*

表5　英国からトルコへの輸出の商品構成（単位：£）

商品名/年	1812	%	1816	%	1818	%	1820	%	1824	%	1825	%
綿製品	224,078	72	188,899	63	545,217	67	412,184	75	561,356	75	482,355	76
毛織物			11,072	3.7	29,643	3.7	12,871	2.3	10,778	1.4	8,198	1.3
砂糖	50,101	16	24,220	8.1	40,771	5.1	35,364	6.4	56,180	7.5	25,786	4.1
錫			26,016	8.7	37,230	4.6						
鉄，鉄製品					69,356	8.6	32,878	5.9			12,372	2.0
不明分	36,850	12	49,034	16	84,313	10	59,494	11	119,424	16	104,436	16
総計	311,029	100	299,241	100	806,530	100	552,791	100	747,738	100	633,147	100

全て Wood, *op. cit.* より引用

この時期レヴァント貿易の貿易品目はどのようなものであったのだろうか。貿易品目については、輸入に関しては表四でほぼ筆者の扱う全時期を見通すことができる。輸出については一九世紀以降しか表が用意されていないが（表五）、一八世紀以前に関しては毛織物輸出額の表（表六）を参照することでだいたいのことが明らかになろう。まず、輸出に関しては実に明瞭な事実がある。すなわち、およそ一七七〇年代まで輸出の八―九割が毛織物で占められているのである。（表六は一七世紀については殆ど示していないが、一七世紀後半に一七〇〇年前後とほぼ同量の毛織物輸出が行われていたことが解っている。[9] これから考えて輸出の九割前後を毛織物が占めていたのは間違いない。また、一七世紀前半には英国の輸出品の殆どを毛織物が占めているのでレヴァント向け輸出についても同じことが言えると思われる。）

次に輸入を見る。初期には輸入品目は実に多様であった。一五八八年九月二九日にロンドンに帰港したヘラクレス号その他計五隻の船の積み荷の内容が解っているが、ここには後に主力商品となる生糸の他、原綿、干ぶどう、綿織物、絹織物、没食子などのレヴァント地方の特産品が並び、その上インディゴ、胡しょう等の東インドの産物が見られる。[10] しかし、このような熱帯産品は、東インド会社の設立以後その手中に完全に移ってしまったために、一六二〇年代以降ぐらいからレヴァント会社はレヴァントの特産品のみを扱うようになった。[11] それは主に生糸、干ぶどう、織物類、原綿、綿糸、没食子である。特に生糸と干ぶどうが重要で、一六二〇―六〇年代にかけてはこの両者の合計が輸入総額の六―八割を占める。しかし、一八世紀になると干ぶどうは殆ど輸入されなく

表6　レヴァントへの毛織物輸出（額）

年	£	%	年	£	%	年	£	%
1697—98	144,000	84	1791	41,095	16*	1817	30,114	
1699—00	191,000	85	1792	34,334		1818	29,643	3.7
1699—01	217,000	93	1793	9,078	20	1819	15,490	
1722—24	190,000	91	1794	6,395	5.4	1820	12,871	2.3
1752—54	135,000	89	1795	12,228	8.2	1821	3,772	
1772	59,191		1796	28,580	21	1822	1,744	
1773	62,732	69*	1797	3,056	13	1823	4,698	
1774	89,556		1798	13,927	25	1824	10,778	1.4
1775	131,857		1799	47,398	24	1825	8,198	1.3
1776	115,306	130*	1815	10,926				
1790	15,070	15*	1816	11,072	3.7			

%…レヴァント向け輸出に占める毛織物の割合。同じ年のレヴァント向け輸出で割ってあるが，同じ年のレヴァント向け輸出のデータがない時は（＊印），表3から相当する時期のデータを借りて計算した。このため，この数値はあくまで目安である。1776年については，この年の毛織物輸出額が表3の1776—80年の平均輸出額を上回っているので，百%を超えた。

1697—98，1699—00，1772 以降…Wood, *op. cit.*

他…Davis, *Aleppo.*

1752—54まで…official value

1772以降…declared value (real value)

なる。

干ぶどう貿易は以下の二つの理由から減少したと思われる。一つは、一八世紀に入る前後からヴェネツィア領がレヴァント会社の管轄から離れていることである。一七世紀レヴァント会社が輸入していた干ぶどうの多くは、ヴェネツィア領のザキントス島やケファリニア島で生産されたものであった。[12] これらの地域との貿易がレヴァント貿易の統計から切り離された時、レヴァント貿易の干ぶどう輸入額は当然のことながら激減したのである。また、一六七五年のカピチュレーションで、ヴェネツィア領につぐ生産地であった小アジアからの干ぶどう、果物の輸出が禁止される。[13] このため、干ぶどうは一八世紀にはギリシアのパトレなどから輸入されるにすぎなくなった。

こうして一八世紀には輸入品目はかなり限られたものになった。表四は生糸、モヘア、原綿、綿糸の四品目が輸入の九割以上を占めていることを物語っている。一七世紀に比べて、干ぶどうのほか、織物、没食子の輸入が減っているが、前者に関しては一八世紀英国でとられた国内製品保護政策の結果織物の輸入に高関税が課せられたことが大きく影響していよ

うし、後者のほうは何らかの染色技術の改良のためであろうと言われている。主要四品目のうちでも生糸一品目のみに輸入が集中しているのが一八世紀前半の特徴である。実に全輸入の七―八割が生糸に占められている。その一方で原綿・綿糸の輸入量はむしろ減少している。世紀後半になると情勢は変化し、まず生糸への集中が緩和され、原綿と綿糸のほうが盛り返してき、次に干ぶどうが増え出す。これは、先のカピチュレーションの禁止の強制力が失われイズミルからの干ぶどうの輸入が伸び始めるからである。

レヴァント貿易では、一七七〇年代に到るまで毛織物が輸出の八―九割を占め続け、一方で輸入品目が次第に限られるようになり一八世紀においては殆ど生糸一品目となった。この貿易品目の移り変わりは、前章で説明したようなレヴァント商人の交易活動のイスタンブル、アレッポ、イズミル三都市への集中化の必然的な結果であった。

レヴァント貿易の貿易品目は、この貿易が商業革命期に次第に重要度を喪失していった理由を明白に物語ってくれる。一七世紀後半から一八世紀後半までの百年余りの間に英国の貿易は量的にも決定的に変わった。一七世紀前半の英国貿易は、その殆どが一六世紀同様のヨーロッパ向けの毛織物輸出であった。ところが、一七七〇年代になるとヨーロッパ貿易の比重が小さくなり、輸出、輸入ともにアジアや新世界との貿易が全体の半分を占めるようになる。また輸出の四分の三を占めていた毛織物は純輸出の四割強を占めるのみとなり、かわって様々な他の工業製品の輸出が伸びた。それよりも注目されるのは再輸出の急速な成長で、一八世紀後半には輸出総額の四割弱に相当するまでになる。主要な再輸出品は煙草、綿製品、コーヒー、砂糖であり、これらはいずれも西インドやアメリカ、東インドで産出される植民地物産で、殆どがヨーロッパに再輸出された。また、植民地では綿花のような英国の新興工業の原材料が生産され、大量に輸入された。

一方で、レヴァント貿易はこのような貿易の変化には全く見舞われなかった。商業革命期を通して、レヴァント方面への輸出は殆どが毛織物で、植民地物産の再輸出も他の工業製品の輸出も全く生じなかった。輸入も原綿へのシフトはまだ生じず、返って生糸への集中が強化されていた。換言すれば、レヴァント貿易は商業革命とは無縁の存在であったのであ

る。英国経済が飛躍を遂げた時にレヴァント貿易が重要性を喪失していったのは、このように考えてみれば自明のことである。

だが、レヴァント貿易の主要品目であった毛織物や生糸が商業革命以降の英国では花形商品とはなり得なかったことそのものが、これほどまでの貿易の衰退を招き寄せたのではなかった。レヴァント会社の毛織物輸出と生糸の輸入が伸び悩み減少する一七世紀後半から一八世紀中葉まで、英国産毛織物の輸出は英国全体でみれば緩やかではあるが伸び続けており、また、生糸の輸入も砂糖やコーヒーの成長率と比べれば控えめではあるがかなりの勢いで伸びているのである。[14] 一七世紀後半以降レヴァント産生糸の輸入とレヴァント向け毛織物の輸出が殆ど増えないことと一八世紀のこれらが減少することは、ともに英国全体の動向とは反しており、ひとつながりの動きとして考えてみなければならない。

また、なぜ商業革命期にレヴァント貿易の貿易品目が生糸と毛織物に集中し、他の商品が出現しなかったが問われなければならないであろう。表から解るように、一九世紀のレヴァント貿易は、輸入では原綿・綿糸、茜、輸出では綿製品、砂糖、鉄・鉄製品が主要品目となっている。一九世紀以降のレヴァント貿易は急速に回復するが、このような新たな貿易品目、特に原綿・綿糸の輸入と綿製品の輸出の急成長が貿易の拡大の原因になっているのは明らかである。（表四、五）

一八世紀末より一九世紀初頭にかけての時期にレヴァント貿易は毛織物と生糸の交換を中心としたものから、綿製品の輸出とその原材料の輸入に重点を置いたものに移り変わっている。生糸と毛織物の交換から原綿の輸入と綿製品の輸出へという貿易の転換は、おそらくは一七七〇年代以降生じた。マソン P. Masson 統計によれば、一七七七年の英国の毛織物と綿織物（モスリン）の輸出額は、それぞれ六五六〇〇〇―六九一〇〇〇フランである。[16] だいたいこの頃毛織物と綿織物の輸出量が均衡し、以後徐々に綿製品の割合が毛織物のそれを上回っていったと考えてよいであろう。また原綿・綿糸の輸入は、七〇年代には全輸入の五割に達しているが（表七）、生糸の輸入は五〇年代まで半分以上を占めており六〇年代も五〇年代と同じくらいの輸入が行われているから、七〇年代になって初めて原綿・綿糸の輸入量が生糸を上回り始める

表7　レヴァントからの原綿，綿糸の輸入

年	lb.	£	%	
1620—21		42,189	23	
1629—30		29,675	8.4	
1633—34		3,809	1.8	
1663, 69		28,000	6.7	
(1697	483,136	13,050*)	—	0.027 Schumpeter
1699—01		25,000	8.0	
1722—24		12,000	3.4	
1725	667,279	19,462	6.8	0.029 Wood
(1725	146,340	2,630*)	—	0.018 Schumpeter
(1735	106,760	1,710*)	—	0.016 Schumpeter
1750	598,605	17,459	11	
1752—54		20,000	13	
1755	738,412	21,410*	13	
1775	2,175,132	63,441	43	
1785	2,190,027	63,510*		
1787	3,227,964	93,610*	57	
1789	4,406,892	127,800		
1817		799	0.4	
1818		24,112	6.5	
1820		7,863	1.9	
1822	425,850	13,430*	—	0.032 Wood
1823	1,234,788	39,510*	—	0.032 Wood
1824	7,910,918	249,271	33	
1825		611,547	51	

(　)内は綿糸だけの数値…Kurmuş, "The Cotton Famine".
*は換算値，レートは欄外のものを使用した。
1620—21, 29—30, 33—34…Millard, "The Import Trade of London".
1663, 69, 1699—01, 1722—24, 1752—54…Davis, "English Imports".
1724, 55, 75, 85, 87, 89…Kurmuş.
他…Wood, *op. cit.*

と考えられるのである。

一九世紀以降のレヴァント貿易が貿易品目の変革を通して急成長できたのならば、なぜこの変化はもっと以前の時期に生じなかったのだろうか。もちろん英国で綿製品の製造が本格的に成長するのは一七七〇年以降であり、原綿の輸入や綿製品の輸出もまたこれ以降に急速に伸びる。しかし、一八世紀前半に原綿の輸入が伸びる余地は既に十分にあったのであり、また砂糖などの再輸出が増加する可能性もあったのではないか。一九世紀以降のレヴァント貿易と一八世紀前半までのそれを比較する時、時代が異なるとはいえ、一八世紀前半までの貿易に硬直したものを感じないわけにはいかない。

次章では、レヴァント貿易が一七世紀後半以降生糸と毛織物の交換に偏り、この生糸と毛織物の貿易が伸び悩み減少していくのはなぜかを少し詳しく見ていきたい。

① 筆者が以下で用いる統計値は、ミラード、デイヴィス、シュムペーター、ウィトワース、ウッドの研究によった。まず一七世紀前半はミラードの統計を借用した。ミラードは、断続して残存するロンドン港の関税簿 London Port Book や、当時の書物に挙げられている数値

を駆使して統計を作成している。ミラードのこの統計は明らかにリヴォルノやヴェネツィア領との交易を含むものである。一七世紀後半については六二―三年、六八―九年のものしか示すことができないが、これもヴェネツィア貿易を含む。一六九七年以降についてはシュムペーターもウィトワースも貿易総監統計を利用している。これはトルコ貿易として統計がとられている。一九世紀以降の統計は筆者はウッドのものを利用したが、これもオスマン帝国との交易に限られている。

Millard, *op. cit.* Davis, *Aleppo*, "English Imports from the Middle East: 1580–1780", in M. A. Cook, ed., *Studies in the Economic History of the Middle East*, London, 1970(以下、"English Imports", と省略), "English Foreign Trade, 1660–1700", "English Foreign Trade, 1700–1774". E. B. Schumpeter, *op. cit.*. Sir. C. Whitworth, ed., *State of the Trade of Great Britain*, London, 1776. Wood, *op. cit.*

② Stoianovich, *op. cit.*, p. 76.

③ 一七世紀後半の毛織物輸出量は一万三千―二万反程度である。

④ レヴァント会社の総裁であったトマス・ロウは、一六二六年までの輸出額は年平均二五万ポンド位であったと述べている。また、一六一七年には一隻の船が一八万ポンドの、三七年には二隻の船が二〇万ポンドの輸出を行ったという。Wood, *op. cit.*, p. 43. しかしこれらの数値は少し過大評価と思われる。

⑤ 一六〇五―一四年については Millard, *op. cit.*, p. 27 に統計があげてある。一六四〇年の総輸出額は川北稔氏の推定値。川北稔、前掲書、一三三頁。

⑥ 一八〇〇、一〇年代の英国の海外貿易は輸出が五一〇〇―六七〇〇万、輸入が五六〇〇―七二〇〇万ポンドである。二〇年代ではそれぞれ、五千万、六六〇〇万ポンド、四〇、五〇年代では輸出は七千万から一億を超過し、輸入も八千万から一億五千万ポンドに達する。Davis, *The Industrial Revolution and British Overseas Trade*, Leicester, 1979, pp. 89, 91, 93. この数値と表三を比較するとだいたいこの%となる。

⑦ Wood, *op. cit.*, p. 43.

⑧ 以下の商業革命についての説明は、川北稔氏の前掲書に依拠した。

⑨ レヴァントに輸出された毛織物は、一七世紀後半では一万三千―二万反、一八世紀前半では一四〇〇〇―一八〇〇〇反程度で、一八世紀に入ってから若干少なくなってはいるが、殆ど同程度である。レヴァントに輸出された毛織物の反数については、Davis, *Aleppo*, p. 42 に一六六六年から一七六五年までの統計がでている。

⑩ T. S. Willan, "Some Aspects of English Trade with the Levant in the Sixteenth Century", *English Historical Review*, 70, 1955.

⑪ 東インド会社は、既に一六〇三年に百三万重量ポンドもの胡しょうを輸入しており、その後も五〇万から百万重量ポンドほどを輸入している。この量から考えて東インド会社は一七世紀以降英国の胡しょう貿易を完全に掌握したと思われる。また、インディゴに関しても、二〇年代ごろから相当額が輸入されており、だいたいこの時期を境として熱帯産品の輸入はほぼ完全に東インド会社の行うところとなったと判断される。K. N. Chaudhuri, *The English East India Company: the Study of an Early Joint-stock Company 1600–1760*, London, 1965, p. 148.

⑫ Millard, *op. cit.*, p. 187–9.

⑬ Wood, *op. cit.*, p. 98.

⑭ 毛織物の輸出額は、一六六〇年代では一五〇万、一七〇〇年頃には三百万、一八世紀中葉には四百万ポンド弱、一七七〇年代には四百万を少し越えるなどこの頃までは減少していない。（八〇年代には三八八

万ポンドと少し減少している。)また植民地以外の地域向けだけでみても、一八世紀中葉までは増加傾向にある。また生糸も、一七〇〇年頃には三五万ポンドほどであったのが、七〇年代には七五万ポンドになっており、この間常に輸出品目の上位五位までに入っている。Davis, "English Foreign Trade, 1660–1700", pp. 164–6, "English Foreign Trade, 1700–1774", pp. 300–303. 八〇年代については、Davis, *The Industrial Revolution and British Overseas Trade*, p. 94.

⑮ 本来なら原綿と綿糸は分けて論じるべきであるが、統計で両者が一緒にされていることが多く区別できないので、やむを得ず本論ではまとめておく。

⑯ イナルジクの引用。H. İnalcik, "When and How British Cotton Goods Invaded the Levant Markets", in Huri İslamoğlu-İnan, ed., *The Ottoman Empire and the World-Economy*, New York, 1987, p. 376.

第三章　一八世紀におけるレヴァント貿易の衰退

(一)　再輸出と毛織物輸出——フランスのレヴァント市場への進出——

前章で、一八世紀後半になるまで英国がレヴァント植民地物産の再輸出を殆ど行い得なかったこと、また一八世紀に毛織物の輸出量が減少していくことを見た。この原因は、一八世紀に英国にかわってレヴァント貿易の首位に立ったフランスとの比較の中で、明らかになろう。

フランスはヨーロッパで最も早くカピチュレーションを獲得した国の一つであり、レヴァント貿易は早くから盛んであったが、一六六〇年代頃には極度の不振に陥っていた。しかしその後のコルベールの諸改革は一七世紀の末ごろから急速に効果を現し始め、フランスのレヴァント貿易は革命前夜まで成長し続けるのである。①

フランスと英国の貿易内容には、一七〇〇年以降はっきりとした違いが現れてくる。フランスの場合においても、毛織物と生糸が一八世紀前半まで貿易品目の首位を占めているのは変わりがないが、殆どこの二品目から貿易が成り立っていた英国とは異なり、その貿易品目は一八世紀初頭からかなり多様であった。②輸出において毛織物への依存度は七割弱と高かったが、既に砂糖やコーヒー、インディゴなど熱帯産品の再輸出が見られる。輸入は更に多様で、生糸は四分の一を占

めるにすぎない。このような貿易品目の多様性がフランスのレヴァント貿易の発展を促す一つの要素であったことは、その後の貿易の展開を見れば明らかである。生糸、毛織物にかわって、綿花・綿糸や染料、オリーブ油、羊毛の輸入、砂糖・コーヒー・インディゴ・コチニール等の熱帯産品の再輸出が増加し一八世紀の末までにそれぞれ全輸出輸入額の五割を超過する主力商品となる。また、フランスの場合には毛織物の輸出も一七七〇年代まで急速に伸び続けており、英国とは著しい対照をなしている。

フランスの例が示すように、一八世紀当時のレヴァント市場にはコーヒーや砂糖などの植民地物産の需要があり、毛織物への需要もまだまだ伸びていた。それならば、なぜ英国の場合これらの輸出を増やすことができなかったのだろうか。

英国産毛織物の輸出の低迷は既に一七〇〇年代から指摘され始めている。一七〇二[3]、一〇年にはまずイズミルで[4]、二八年にはサロニカで[5]、三九年にはイスタンブル、アレッポ、イズミルで[6]、英国産毛織物が売れ残っていることが指摘される。また一八年にレヴァント商人が下院に提出した陳情書の中にも危惧の念が現れている[7]。これらの史料の中で、当時の英国商人達は不振の原因を何に見ているだろうか。

「イスタンブルとアレッポにおけるフランスの輸入は年に約一万五千反である。そして両都市では過去数年そして現在も英国の毛織物は売れないままになっている。これは大量のフランス産毛織物輸入によって引き起こされた。特にアレッポでは会社の船がイスケンデルンからやってきた二月には、約五千反が売れ残っていた。イスタンブルでは四千反、イズミルでは三千反売れ残っている。」（一七三九年）

英国商人の危惧の念は、フランス産毛織物のめざましい進出に向けられていた。それでは、後から市場に参入したフランス産毛織物が英国産毛織物を凌駕し得たのはなぜだろうか。それは第一にフランス産が英国産毛織物よりもこの地域の要求に適合した品質であったためだと言われている。当時フランス産毛織物は次のように評されていた。

「彼ら（フランス人）の布はふわふわしているが、薄く、軽く、柔らかく、トルコ人の好みを良く採り入れている。彼らの製造業

は適切な規制の下にあるので品質を維持している。」（ハンウェイ）[8]

次のデフォーの言葉は、非常に身びいきな内容ではあるが、当時の英国産毛織物とフランス産毛織物の差異を明確に述べている。

「彼ら（フランス人）がそこに送り込む品物は確かに彼らの最高の品ではあるが、しかもなおその貿易においてさえ彼らがはたして我々を追い抜くことができるかどうか、私は経験ある人々に訴えたい。（中略）彼らの毛織物の一梱は英国の織物の一梱と同じ目方があるだろうか。また市場においてそれは同じ価格で売れるかどうか。（中略）どこの市場にも価格が安いというだけで品質の劣った製品に甘んじるバイヤーがいることは確かである。これらの人々はフランス製の織物を買うだろう。（中略）フランスの毛織物は確かに英国品と同じほど体裁も良く、仕上がりも奇麗でまた包装も良く、優れた装飾を施しており、色も見事である。（中略）しかしその実質は欠けている。（中略）英国製は着てみてしっかりしている上になめらかで最後まで丈夫だが、フランス製は着た感じが粗く、軽い上にふわふわしていてそしてすぐにぼろになる。（中略）他方、英国の毛織物は、最後まで板のような厚みを失わず、しっかりしていて強靱で、着古してもなお一種の美しさを保っている。[9]」

「薄く、軽く、柔らかい」フランス産毛織物は、トルコの南部諸州の気候にふさわしいものであった。[10] またフランスは近東での要求を良く研究し、トルコ人の好みに良く合致した色彩の織物を輸出した。[11] またデフォーの言葉は、フランス産毛織物が安価であったことを暗示しているようである。

しかしフランス製が英国製の毛織物に比べて安かったかどうかを実証することは困難である。英国産毛織物が上質品及び並質品からなっていたのに対して、フランスは中級品を専ら販売していたし、また反物自体の長さも異なっており、単純に価格を比較することはできない。[12] ただ一般的に輸送コスト、国内賃金、原料（スペイン産羊毛）が英国に比べ安価であったことを原因としてフランス産毛織物のほうが安かったと言われている。[13] ディヴィスはそれに加えて、一七三〇年代までダンピング輸出が行われていたと説明する。フランスはこれにより生じる損益をレヴァント産生糸の販売から得る利益で相殺していたという。

このデイヴィスの説明には具体的な根拠が与えられていない。しかし、ダンピング的な要素を想定したくなるまでに、フランスの進出は急速であった。一六九〇年頃に千反前後であった毛織物輸出は、一七四〇年ごろにはその三〇倍の三万反にも伸びているのである。[14] これは、この間英国産毛織物の輸出量が一万五千から二万反程度に安定しており殆ど無変化なのと極めて対照的である。

このような販売量の差異は、フランスと英国の商人の貿易方針が根本的に異なっていたことを暗示しているのではないだろうか。英国産毛織物はそれがレヴァント市場をほぼ独占していた一七世紀後半でも販売量を伸ばしていない。これはレヴァント会社の貿易方針が常に貿易の拡大を拒み、販売量を制限することで値崩れを防ぐことにあったためだと考えられるのである。一方、フランスは一七三五年ぐらいまでは販売や価格の統制がなく、そのため無節操なまでに毛織物が輸出された。[15] このため一八世紀にはいるとレヴァント市場は瞬く間に供給過多となる。長い間市場を独占し、販売量の制限による価格統制によって巨利を得ていた英国商人には、これは到底戦い難い情勢であったろう。このように供給過多になれば当然価格は暴落したであろうし、そうなればフランス商人のやりかたは英国人の目にはダンピングとも写ったであろう。一七〇〇―三〇年代半ばという時期はまだ英国の毛織物の輸出量は決定的には減りだしていないが、しかしこの時期こそは、競争不在の中で培われてきた英国の貿易方針そのものが、チャレンジを受け完全に時代遅れのものになったレヴァント貿易の転換点だったのではないだろうか。

しかしその後両国の貿易の命運を決定的に分けたのは、貿易品目の差異であると思われる。英国の貿易品目の乏しさとフランスの品目の多彩さを比較すると、両国の貿易の活力が全く異なったものであっただろうと想像できる。

フランスの貿易の活力がとりわけ強く感じられるのは、輸入においてである。フランスにとってレヴァントは原材料供給地として重要な地域であった。フランスのレヴァント貿易は常に輸入が輸出を大きく上回っており、この対トルコの貿易赤字は実に一九世紀以降も継続する。[16] ヨーロッパ諸国がオスマン帝国と貿易する際、貿易差額を金銀塊や現金で持ち出

すことは禁止されていた。[17] このため、ヨーロッパ諸国は輸入額を上回る輸出を行うことはできなかった。従って、貿易の規模はどれだけオスマン帝国の物産を輸入できるかで決定されたのである。英国の場合、一七世紀後半から輸入品目が多様性を失い生糸一品目へ極端に集中し始めたことは既に何度も述べたところである。一八世紀に生糸以外の輸入品目を開拓できなかったことは、英国のレヴァント貿易にとって大きな打撃であった。一方、フランスでは生糸の輸入が鈍化し始めた頃に、始めは綿糸、後には綿花の輸入が急増し、輸入額を増加し続けることができた。

あり余る輸入を行っていたフランスは、輸出をも成長させることができた。限界に達した毛織物にかわり、植民地物産の再輸出を伸ばすことも可能であった。一方英国は、伸び悩む輸入額に押さえられたことも原因して、毛織物はおろか再輸出活動も儘ならなかったのではないかと思われる。

(二) 生糸の輸入

前節で、英国がレヴァントからの輸入を増やせなかったことに貿易衰退の一因があることを指摘した。それでは、英国の場合なぜ一八世紀に入ってから輸入が鈍化し始めるのであろうか。

まず、首位の商品であった生糸について調べてみる必要がある。一八世紀の英国では輸入生糸と撚糸の殆どを国内で消費していたから、[18] 英国の絹工業との関連で考えていくことで答えが得られるであろう。

英国の絹工業は、一六世紀から一七世紀にかけてフランスから亡命してきたユグノーが伝えたもので、特にナントの勅令廃止後亡命ユグノーの増加にともなって発展し、重要な工業部門の一つに成長した。[19] だが、英国で絹織物が本格的に製造されるのは一八世紀からである。[20] 一七世紀以前の英国の絹工業は、薄手の上質の絹織物製造が中心であった南欧の先進地域と比べると非常に遅れていた。英国産の撚糸は撚りが甘く、これを用いては高級な絹織物は製造できず、そのため混織や織り幅の狭いリボンの製造が中心であった。また織物のほかに、太い生糸や手より糸を使った様々な服飾品の製作が

行われている。絹ボタン、ボタン穴かがり、縁飾り、縫いとり、ストッキング等である。一七世紀までは生糸はレヴァントからほとんどが輸入されており、英国のこのような下級織物や服飾品の製造はこのレヴァント産生糸と密接に結びついていたのである。

一方で、当時流行していたルートストリング、アラモード絹といった光沢のある薄手の高級絹織物製造には、細く太さの均一な強力な撚糸が必要であった。特に経糸には強度と光沢が要求された。この薄絹製造に不可欠の高級撚糸はオルガンツィーネ organzine と呼ばれ、水力を使って強力に撚りをかけて製造されるものであった。[21] この製法は一七世紀にはイタリアでは既に全国的に普及していたが、英国では知られていなかった。一七世紀末になると英国でもこうした高級絹織物の製造が始まるが、用いる撚糸はすべて輸入されていたのである。

当時の英国の製糸技術はどれほどのものであったかは、次の二つの法律がよく物語っている。すなわち、一六八九年には「絹撚糸の輸入を減ずるための法律 An Act for the Discouraging the Importation of Thrown Silke」が発布され、トルコ、ペルシア、東インド、中国などからの絹撚糸の輸入が禁止される一方で、イタリア産撚糸は例外とした。[22] また九三年には「イタリア、シシリア、ナポリ王国の細い絹撚糸輸入のための法律 An Act for the Importation of Fine Italian, Sicillian, Naples Thrown Silke」が発布され、フランスとの戦争のためイタリア産絹撚糸の輸入が妨げられている当時の情勢に鑑みて、生産地外からのイタリア産撚糸輸入を一時的に認めた。[23] 一七世紀末の段階では、英国の撚糸製造は一定水準に達してはいたが、イタリア産の高級撚糸に匹敵するものはまだ製造不可能であったことがわかる。

一七一七年ジョン・ローム John Lombe がダービーにオルガンツィーネ製造機械を導入した工場を設立して以降、事情は大きく変わり、英国でも上質の絹撚糸が製造可能になった。[24] ロームは水車を動力として生糸に撚りを入れる製法を導入し、ここで造られる生糸は当初からイタリア製を凌ぐとさえ言われた。[25] この後オルガンツィーネの製法は英国全体に徐々に普及し、ある程度自給が可能になったと思われる。早くも三三年には、絹撚糸業者が大蔵省にイタリア、シシリアか

らの絹撚糸の輸入の禁止を求めている。[29] 古くからボタンやリボン、絹ストッキングなどの製造が盛んであったコングレトン Congleton、マクレスフィールド Macclesfield でも、それぞれ一七五二、五六年に撚糸工場が設立されている。[30]

以上述べたように、英国では一八世紀前半に国家の保護のもとで絹織物工業の技術が向上した。一方、この時期の生糸輸入は興味深い変化を示す（表八）。まず生糸の総輸入量は一七六〇年代ごろまで四〇万重量ポンド程度に留まるが、その後急増し一八二三年には二四五万重量ポンドとなっている。ところが絹撚糸は一九世紀まで三〇—四〇万重量ポンドに留まっていて殆ど増えない。これは、一八世紀前半の撚糸技術の改良が世紀後半になって広く普及したことを示していると思われる。また国別でみると、レヴァント産生糸は一七一〇年をピークとして以降は減少傾向にあり、かわってこの頃ベンガル産

表8　英国の生糸，撚糸の輸入量（1000 lb）

年	生糸						撚糸
	レヴァント	ベンガル	中国	イタリア	他	総計	総計
1663, 69	264	計 1		19		284	82
1671—80		24	4				
1681—90		61	16				
1691—1700		31	5				
1701—05	216	61	60				
1706—10	194	42	4				
1710—15	280	49	7				
1716—20	258	84	4				
1721—25	240	73	16	21		350(345)	294
1726—30	259	137	1	20	9	426(414)	269
1731—35	181	141	15	32	28	397(397)	278
1736—40	135	143	0	19	42	339(334)	231
1741—45	145	119	0	60	17	341(338)	217
1746—50	136	60	0	76	33	305(303)	214
1751—55	112	57	104	101	32	406(403)	304
1756—60	133	28	119	136	25	441(402)	302
1761—65	112			202	46		409
1823	203	1,219	393	197	440	2,452	360

1765まで…Davis, *Aleppo*, p. 42, 139.
ベンガル，中国…K. N. Chaudhuri, *The Trading World of Asia and the English East India Company*, appendix, pp. 533–5.
1823…Progress and Present State of the Thrown Silk Manufacture, *Edinburgh Review*, 1826, p. 80.
（　）内…Davis の計算した総計

生糸が増える。しかし、ベンガル産生糸も四〇年以降は減少し、五〇年代ごろからイタリア産と中国産生糸の輸入が急速に増加する。これらの生糸の品質については、次のように言われている。まず、イタリア産生糸はもっとも高級で、オルガンツィーネ製造に適していた。次に、中国産も美しいつやと輝きをもち、非常に細い高級品であった。[29] これに対して、ベンガル産は太く、しかも太さが不均等で下級品であった。[30] そして、レヴァント産生糸もベンガル産と同程度で、これからはオルガンツィーネは製造できなかった。[31]

従って、一七一〇年代頃を境とするレヴァント産生糸からベンガル産生糸へのシフトは下級品の中での競合であり、五〇年代を転機とするイタリア産・中国産へのシフトは高級品志向化と言えるだろう。価格的に見て、レヴァント産はベンガル産より高く、[32] ベンガル産の輸入が本格化し始めたこの時期にレヴァント産の輸入が鈍化したのは理解できるところである。また、五〇年代に英国の各地でオルガンツィーネ製造の工場が設立されたことを考えると、この時期需要が高級化するのは当然であろう。実はこの様な生糸の高級化志向は英国だけのものではなく、絹織物の先進地域では既に一七世紀からレヴァント産生糸の使用量が減っていたらしい。[33]

ただ、レヴァント産生糸は、ペルシア産やシリア産、エジプト産生糸を含み、品質も多様であった。英国の場合エジプトとの取り引きは僅かであったから、ペルシア産とシリア産生糸が中心であった。ペルシア産では、シェルバッセ Sherbasse とアルダセト Ardasset と呼ばれる二種の商品が輸入されていた。[34] 前者は現地では織工の生糸と呼ばれており、錦織に使用される物でペルシア産の中では最高級品であった。[35] 英国ではシェルバッセが輸入の主流であった。[36]

しかし当時はサファヴィー朝の最末期であり、一七二二年にはイスファハーンをアフガン人に攻略されてこの王朝は事実上瓦壊した。これは生糸の生産地帯に壊滅的な打撃を与えた。この地域はまずロシアとトルコの争奪の的となって戦火をあびたばかりではなく、ナーディル・シャーによって奪回された時期においても搾取された。ハンウェイは四三年にカスピ海沿岸地域に滞在していたが、当地の惨状を次のように述べている。

「一七四三年にシルヴァーン、四四年にシラス、アストラバード、ハザルジャリブで起きた暴動は、何千という人々の虐殺とその地域の殆ど全きせん滅をもってのみ抑圧し得た。（中略）彼（ナーディル・シャー）がこのような継続する国内外の戦争を維持するため臣民に課した重税は彼らを貧困の極みにまで零落させ、絶望に追いやり、何千もの人々に国外脱出の道を選ばせている。[36]」

「ギラン在の英国の仲買人が同様の試み（毛織物販売）を行った時、彼らは町と周辺の地域がどんな取り引きをする望みも枯れ果ててしまうほど荒廃した状態にあることを発見した。[37]」

ハンウェイは「このような状況下でいったいいかなる貿易が行いうるというのだろうか」と述べて、[38] 生糸産地の荒廃がレヴァント会社の衰退の一つの原因であったとする。

一七三〇年代頃より、レヴァント会社はペルシア産生糸よりもシリア産生糸を多く輸入するようになり、最終的にはシリア産が輸入生糸の大半を占めるようになった。[39] シリア産生糸は輸入され始めた時はペルシア産に劣ると言われたが、後にはもっと高い評価が与えられた。また、トルコ領内では、シリアのほかキプロス島、アンティオキア、ブルサ等でも生糸が生産されており、ブルサ産は最高の品質であったが、これは国内で消費されており輸出されていなかった。[40]

しかし、ペルシア産のシェルバッセが輸入できなくなったことはやはり大打撃であった。一七二〇年以降のレヴァント産生糸の輸入の減少は、ベンガル産との競合も一つの理由であろうが、シェルバッセがほとんど輸入できなくなったことも大きいであろう。

詳しい研究がないので、これ以上生糸の品質に立ち入って説明することは不可能である。本論では、英国のレヴァント産生糸の輸入が減った原因を以下の様にまとめておく。

一七世紀までは英国に輸入される生糸の殆どがレヴァント産であり、おもに一七世紀の絹工業の中心であった様々の服飾品製造に使用されていた。だが、一七一〇年代になるとより安価なベンガル産生糸の登場のため輸入が鈍化する。また、二〇年代にはいると、一番高品質であり、需要の高まりつつあったペルシア産シェルバッセの輸入が不可能にな

り、これによって更に打撃を受けた。また、一八世紀以降英国の絹工業は発達し、上質の生糸が好まれるようになり、レヴァント産生糸への需要は次第に減少し、代わりにイタリア産や中国産の生糸が大量に輸入されるようになったのである。

（三）レヴァント貿易の性格上の問題点

それでは、英国の場合なぜ生糸以外の商品の輸入が一七七〇年代まで生じなかったのであろうか。

フランスの輸入品を見ると、原綿が次代を担う最も有望な商品であったと判断される。フランスの場合には、一七〇〇—五〇年の間に原綿の輸入量は一二倍にも増えている。[41] だが、英国の場合はむしろ減少しており七〇年代になって初めて増加する。これはなぜだろうか。

このレヴァントからの原綿輸入の動向はある程度英国全体の動勢を反映している。まず、一八世紀前半には英国全体でみても原綿の輸入は余り伸びない。一七〇〇—五〇年の間で、わずかに二倍強に増えているにすぎないのである。[42] 一七六〇年代の紡績技術の革新を経てから初めて英国の原綿の輸入は急増し始める。このように一八世紀全般でみれば、レヴァント貿易は当時の英国の動勢と合致しているのである。

このことから理解されるのは一八世紀前半においては英国の綿工業はまだまだ低水準にあり、大量の原材料輸入を必要としていなかったことである。原材料輸入の伸びから見ればこの時期フランスが英国を上回っており、この時期のフランス綿工業の水準の高さを窺わせる。一八世紀前半の英国の綿工業は、後半の発展から安易に想像されるものとは違い、かなりつつましやかであった。このことがまず第一に、英国レヴァント貿易の発展を阻害しているのであることは疑えない。

しかし、もう少し細かなことを見ていくと、この時期レヴァントからの原綿の輸入が減ずるのは、わずかでも輸入が増

えている英国全体の趨勢にあっていない。この減少の原因はそれでは何に求められるだろうか。

一七世紀には、原綿や綿糸に関してもレヴァントは英国にとって唯一の供給地であった。しかし、原綿の場合は既に一七〇〇年までに西インド産の輸入がレヴァント産のそれに追いついている。[43] 西インドからの原綿の輸入はこの後順調に伸び続け全体の三分の二のシェアを占めるようになる。[44] 西インド産の原綿が英国の緩やかな需要の増加を全て吸収してしまい、更にはレヴァントのもっていたシェアにも食い込んできているのである。

以上、様々な方面から英国のレヴァント貿易の不振の原因を見てきたが、筆者はこれらの諸原因に付け加えて更に次のようなことを述べておきたい。

英国のレヴァント貿易の極めて著しい特徴は、この貿易が一七世紀の末から一八世紀前半までの数十年間生糸と毛織物の交換のみから成り立っていたということである。しかもこの間殆ど貿易額に変化のないことも注目を引く。これらは、ある程度英国商人の貿易方法に起因すると考えてもよいのではなかろうか。第一章でレヴァント貿易の貿易方法としてジェネラル・シップ制度という制度があり、このジェネラル・シップを派遣する場合輸入を制限するため毛織物一四―一六反の輸出につき一万トンの輸入を認めるという規定があったことを説明した。ここで考えたいのは、この様な規定があった場合商人たちはどのように行動するかということである。彼らは限られたトン数の中でなるべく利潤を増やそうとして、重量当たりの価格が高い高価な商品を輸入しようとするのではないだろうか。そして、生糸の一重量ポンドの価格が約〇・八ポンドであるのに対して、原綿のそれは〇・〇二―〇・〇三ポンドであった。[45] ジェネラル・シップが一六六〇―八三、八七―一七一三、一八―四四年に派遣されたことを考えると、この時期生糸へ輸入が集中した一因にこの制度があったのではないかと思われてくる。また、会社は毛織物・生糸・モヘア以外の商品を雑商品 Gross Goods と呼んで、前三者とは区別していた。[46] そして、ジェネラル・シップの本国向けの船荷において、雑商品が半分以下のときは積み荷一ポンドにつき六ポンドの科料を支払うべきことを規定している。[47] 以上の事実は、輸入の希望が生糸・モヘアに偏りがちであったこ

とを暗示しているように思われる。

ジェネラル・シップ制度は一七四四年をもって廃止されるが、その後も同様の制度が七〇年代頃まで継続する。[18] しかしこうした制限的な貿易方式が影を潜め、レヴァントから英国に向かう船舶数が増えると同時に、原綿や干ぶどうなどの重量当たりの価格の低い商品が増え始めるのである。

また、一六七〇年から一八世紀中葉までレヴァント商人の数は減り続けている。しかも、一八世紀前半には五つの商会によって貿易のほぼ半分が行われていた。[19] このように貿易に携わる人数が少ない以上、どうしても貿易のスタイルは限られたものになったに違いない。しかも、大きな商会では商人が二、三代に渡ってレヴァント貿易に携わっていることもあり、[20] この様な場合は更に貿易内容が固定化してしまっていた可能性があるであろう。

一七五三年に入会規定の緩和があり、その後メンバーは増加し一八世紀末には四百名に達する。しかも、この頃世紀前半に貿易を支配していた家系は途絶え、その結果メンバーは一新されることとなった。[21]

つまり、一八世紀後半の何時ごろかに、レヴァント会社は制限的な貿易制度を廃止し、メンバーを一新して新たな組織に変貌したと思われるのである。一七七〇年代に生じた貿易品目の多様化は、新たなメンバーたちの努力の賜物とも言えるのではないだろうか。[22]

① フランスのレヴァント貿易については、服部春彦「近世のレヴァント貿易とフランス毛織物」『西洋史研究』一三、一九八四年を参照。

② フランスのレヴァント貿易の貿易統計。

フランスからレヴァントへの輸出

	1720年		1750—54年		1786—89年	
	千ポンド	%	千リーヴル	%	千リーヴル	%
毛織物	240	70	8,243	57	5,767	35
熱帯産品	85	25	4,745	33	8,720	52
砂糖	20		980		1,620	
コーヒー	15		840		3,525	
インディゴ	50		1,295		2,020	
総額	345	100	14,600	100	16,675	100

フランスのレヴァントからの輸入（単位：1000リーヴル）

	1700—02	%	1750—54	%	1786—89	%
絹	2,416	24	2,095	9.8	1,638	5.0
原綿，綿糸	1,528	15	5,684	27	12,792	39
羊毛	737	7.4	911	4.3	2,257	6.8
染料	203	2.0	744	3.5	1,886	5.7
油	743	7.5	1,451	6.8	3,261	9.9
麦	735	7.3	3,849	16.3	409	1,3
織物	385	3.9	1,716	8.0	2,530	7.7
総額	9,970	100	21,420	100	33,025	100

服部春彦，前掲論文，40，41頁。
1720年の輸出のみ…Hanway, *op. cit.*, vol. 2, p. 50.

③ Necmi, *op. cit.*, p. 135.

④ *ibid.*, pp. 126-7. このとき英国商人たちは「マルセイユが近いためにフランスがトルコに物資を供給する上でもっている有利さ」について不平を述べている。

⑤ 服部春彦、前掲論文、四四頁。

⑥ Hanway, *op. cit.*, vol. 1, p. 60.

⑦ *ibid.*, vol. 1, pp. 54-58. レヴァント商人達はこの文書の中でジェネラル・シップの派遣が遅れていることに不満を述べ、「このような制限は、フランス、オランダのトルコ貿易を必然的に奨励するもの」であり、この結果「織物は売れ残っていて特にアレッポではそうであるとされている。」と述べている。

⑧ *ibid.*, vol. 1, p. 49.

⑨ ダニエル・デフォー、山川幸夫、天川潤次郎訳『イギリス経済の構図』東京大学出版社、一九七五年、一六五—七頁。

⑩ 服部春彦、前掲論文、四五頁。

⑪ 同、四五頁。

⑫ 同、四四頁。

⑬ Davis, *Aleppo*, p. 129.

⑭ 服部春彦、前掲論文、四一頁。

⑮ 深沢克己氏は、一七三五年までのフランスの毛織物輸出の急成長は「堅実な情勢判断と節度が欠けた」もので、レヴァント市場の供給過剰を招き多くのマルセイユ商人が破産するなどフランス商業の繁栄を意味するものではなかったとしている。この時期の活動に対する反省からフランスは以後国家による販売統制を五六年まで導入する。深沢克巳「一八世紀のレヴァント貿易とラングドック毛織物工業」『土地制度史学』一二五、一九八九年。

⑯ Şevket Pamuk, *The Ottoman Empire and Europian Capitalism, 1820-1913*, Cambridge, 1987, p. 33.

⑰ オスマン帝国は金銀塊、現金の輸出を禁していた。Davis, "English Imports", p. 193.

⑱ 生糸と撚糸の再輸出額は、一八世紀中葉までは四—七万ポンド、後半では一三万ポンド弱で輸入の一—二割弱である。Davis, "English Foreign Trade 1660-1700", pp. 164-6. "English Foreign Trade 1700-1774", pp. 300-3.

⑲ F. Warner, *The Silk Industry of the United Kingdom: its Origin and Development*, London, 1912, pp. 39-43.

⑳ 例えば、デフォーは一七二八年に「イギリスにおいて広幅絹布が造られ始めたのは実につい二、三年前のことである。」、「絹製品はほんの近年になって我々のものと言えるようになった。二、三のリボンは例外として、年間二百万ポンド近くにも及ぶ加工絹の全てを外国から買っていたことは我々の記憶に新しい。」と述べる。デフォー、前掲書、八二、二六七頁。

㉑ orsogli, orsogli alla Bolognese とも表記。この製造の歴史については、Carlo Poni, "Archéologie de la fabrique: la diffusion des moulins à soie alla bolonese dans les États Vénetiens du XVIe au XVIIe siecle", *Annales*, 27-6, 1972. に詳しい。既に一六世紀にはボローニャ地方でオルガンツィーネ製造が行われていた。この技術は一七世紀にイタリア全土に広まる。またチザクチャは、カルロ・ポーニが彼との個人的な書簡でオルガンツィーネについてこのように書いていると報告している。「この強く細く良質な糸―一六世紀から一八世紀において最高のもの―を用いることで、イタリア人はそして後にはヨーロッパの織工達は新しいタイプの織物を生産できるようになった。（中略）トルコ産生糸は南イタリアのものと同じく、緯糸に使用されたのである。」経糸は織物の長さを決定するものであり、制作中に切れると反物の長さに影響するため、丈夫なものが要求された。M. Çizakça, "Price History and the Bursa Silk Industry: a Study in Ottoman Industrial Decline, 1550-1650" in H. İslamoğlu-İnan, ed., *op. cit.*, p. 253.

㉒ Warner, *op. cit.*, p. 631.

㉓ *ibid.*, p. 632.

㉔ ポーニによると、ジョン・ロームはイタリア、特にピエモンテにおいて産業スパイを行い、生命の危険を冒して逃亡して、二年後にオルガンツィーネ製造機を英国に導入した。Poni, *op. cit.*, p. 1475.

㉕ G. H. Jones, "English Diplomacy and Italian Silk in the Time of Lombe", p. 186.

㉖ G. B. Hertz, "The Silk Industry in the Eighteenth Century", *English Historical Review*, 24, 1909, p. 714.

㉗ Warner, *op. cit.*, pp. 127, 146.

㉘ チョードリ K. N. Chaudhuri によれば中国産生糸の八分の一がオルガンツィーネ製造に適していた。残りは太く、シェルバッセに近い品質であったという。また一七三三年の東インド会社の記録には中国産生糸がイタリア産生糸の代用品になると述べられている。K. N. Chaudhuri, *The Trading World of Asia and the English East India Company 1660-1760*, Cambridge, 1978（以下 The Trading World と略）, pp. 349-51.

㉙ ベンガル産生糸の品質の悪い原因は、現地での未熟な操糸技術であった。しかし、東インド会社は一七六〇年にイタリア式の方法を導入したので、最大の欠点であった太さのむらが解消した。このため、一九世紀以降輸入が急増した。一七九六年東インド会社の幹部はベンガル産生糸が適切な太さに操糸されるようになり、オルガンツィーネの製造が可能になったと述べている。Warner, *op. cit.*, pp. 382-3.

㉚ *ibid.*, p. 378.

㉛ 両者の価格については、デイヴィスの調べたアンティオキア、ベルシア産生糸の価格と、チョードリの調べたベンガル産のを比較することができる。これによれば、明らかに後者が安い。Davis, *Aleppo*, pp. 164-6. Chaudhuri, *The Trading World*, pp. 533-4.

㉜ Davis, *Aleppo*, p. 27.

㉝ Necmi, *op. cit.*, p. 82.

㉞ Hanway, *op. cit.*, vol. 2, p. 16.

㉟ Davis, *Aleppo*, p. 165.

ペーターから換算したものは原綿のみで、〇・〇一六から〇・〇二七である。

㊱ Hanway, *op. cit.*, vol. 2, p. 25.

㊲ *ibid.*, vol. 2, p. 28.

㊳ *ibid.*, vol. 2, 26.

㊴ Davis, *Aleppo*, p. 166.

㊵ Necmi, *op. cit.*, p. 98.

㊶ 服部春彦、前掲論文、四〇頁。

㊷ シュムペーターの統計から計算すると、一七〇〇—〇四年の原綿の輸入量は平均一四三万重量ポンド、五〇—五四年のそれは三二二万重量ポンドである。Schumpeter, *op. cit.*, pp. 61-2.

㊸ 一七〇〇年当時の西インド産原綿の輸入額は二万三千ポンド。Davis, "English Foreign Trade 1700-1774", p. 301.

㊹ *ibid.*, p. 301.

㊺ 生糸の価格は一七世紀初頭から一八世紀末まで一重量ポンド当たり〇・七—一・〇ポンドである。一七世紀についてはミラード、一八世紀についてはシュムペーターから換算した。原綿の価格については正確には解らなかった。ウッドが用いているレートは原綿、綿糸を合わせて計算しているもので、〇・〇二九から〇・〇三二である。シュムペーターから換算したものは原綿のみで、〇・〇一六から〇・〇二七である。

㊻ Davis, *Aleppo*, p. 177.

㊼ *ibid.*, pp. 176-7.

㊽ 本稿、八一頁。

㊾ Davis, *Aleppo*, p. 60.

㊿ *ibid.*, p. 73.

(51) *ibid.*, pp. 26, 51. もっとも新メンバー達は入れ替わりが激しく、過去の商人達のような緊密な集団として考えることはできない。

(52) デイヴィスは入会規定の緩和以降の数十年間貿易が最低の水準にあったとして、新メンバーの参加はレヴァント貿易を改善するものではなかったとしている。確かに一七五〇—八〇年代までは貿易額は最低値にある。しかし、ここで注目したいのでは貿易額ではなく貿易品目である。貿易の自由化は直ちに貿易の改善に結びついたのではないが、貿易品目の改善につながり、間接的に一九世紀以降の貿易額の増加につながっていくとしたい。

おわりに

以上、不十分ではあるが一八世紀におけるレヴァント貿易の動向とその衰退の原因について考察してきた。レヴァント貿易の衰退の直接の原因はその主力商品であった毛織物と生糸の取り引き量の減少であった。そして、レヴァント貿易が一七世紀の後半からこの二つの商品に集中していったことと、一八世紀に入ってから新たな商品をなかなか見出しえなかったこととは、同じ一つの理由、すなわちレヴァント会社の性格に起因するのではないかと推測した。

レヴァント会社と同じような経緯を経て設立されたものに、東インド会社がある。東インド会社はレヴァント会社のメンバーによって始められたもので、当初はメンバーも重なっており、議事録も同じノートを使用するなど殆ど同じ会社であった。しかも特許状の表現の曖昧さから、貿易地域の限界が両会社ともはっきりしていず、境界部であるペルシアなどでは独占権がどちらに所属するかを巡り度々紛争が起こった。しかし、その後、東インド会社が交易地域を次第に拡大し中近東から中国までの実に広大な範囲をその射程におさめたのに対し、レヴァント会社は当然その独占の対象であったはずのエジプトやアラビア半島まで東インド会社に譲り渡し、アナトリアとシリアの数港での貿易に満足していたのであった。そして、東インド会社傘下の地域が英国との経済関係を深めていく一方で、トルコ本土と英国の結びつきは一九世紀に入るまで決定的なものとはならないのである。

従来、貿易の成長は、貿易相手地域の市場、原材料供給地としての潜在能力に左右されると考えるのが一般的であろう。しかし、市場・供給地としての能力はその地域の地理的環境やそこにある国家の諸産業への介入の有り様が規定するものである一方、貿易を求める側が常に開拓していくものでもある。英国の帝国形成のプロセスを解明していく上で、英国の各地域への接近がどのように行われていたか、すなわち各地域それぞれで行われた貿易のありかたを再調査することは大切なことではないだろうか。

英国の場合その海外連出のやりかたは実に様々であった。自由に貿易が行われた地域があり、独占の形態をとった地域があった。独占会社の形態も、制規会社、株式会社の違いがあった。また、このそれぞれにおいても個々の会社の歴史は異なっている。貿易の開始された時期、自由化が行われた時期、廃止された時期には差異がある。このような海外進出の方法の違いは、またこれを行った商人達の差異は、各地域と英国経済の結びつきの強度を変え、それぞれの地域の英国経済への従属の性格を変えたのではないだろうか。

日本では、特許会社は前近代的な商業資本の象徴としての負のイメージがつきまとっているので、実証研究が非常に不

足している。しかし、様々の形態があった特許会社をひとまとめに扱って、同じ評価を下すことには問題がある。また、大英帝国の成立の問題を考えるとき、英国の海外進出を最初に果たした特許会社がその後の貿易に残した足跡を見逃してはならないと考える。

（京都大学大学院生　　）

A Study of the Marriage of the Non-Chinese Nation from the Northern Dynasties to the Sui and Tang Dynasties

by

OSABE Yoshihiro

One of the notable things about the political history from the northern dynasties to the Sui and Tang dynasties is the process of the cooperation and the national integration between the Xianbei 鮮卑 nation, who organized an army with founded the Northern Wei dynasty, and the Chinese who were conquered by the Xianbei nation and gradually participated in the government as bureaucrats. Although their cooperation and integration was greatly abetted by the policies of Xiaowen-di 孝文帝, all problems were not solved in a single stroke. After the revolt at the end of the Northern Wei dynasty, their relationship became closer.

Since the author takes marriage between these two nations as having been the most effective means of achieving cooperation and integration, he analyzes several cases of marriage in order to shed light on the structure at that time.

The English Levant Trade and Its Decline in the Eighteenth Century

by

KAWAWAKE Keiko

English trade overseas grew rapidly from the 1660s. The English Levant trade, however, began to stagnate and decline during the 18th century, contrary to other trends. In this essay, the author discusses the stagnation and decline of the Levant trade during the English commercial revolution as well as the various causes which precipitated this phenomenon. The author explains how the Levant Company operated its trade monopoly. She provides statistics concerning Levant trade in

order to clarify the volume and content of the trade conducted as well as its eventual transition. Most trading during the commercial revolution consisted of bartering English cloth for raw silk in the three cities of Istambul, Aleppo and Izmir. Thus, the English Levant trade depended on a single trading pattern. It was natural that it declined during the 18th century when a large quantity of French cloth flooded the Levant market and the demand for Levant raw silk decreased in England. The fact that the company was long controlled by a handful of traders who became increasingly inflexibile was one of the leading causes of the decline of the Levant trade.